

主催：にいがたアートサーカス



西区の顔ですー野菜でアート



「くろさき茶豆」ヒントに「野菜アート」を前面に打出した展覧会

第1会場の西新潟市民会館ホールでは野菜アートを中心とした絵画展。20世紀現代美術の創始者マルセル・デュシャンに敬意を払い、彼の出生地ブランヴィルを冠にした「蒲原平野またはブランヴィルの庭」と命名して、巨大な顔のオブジェを中心に、ワークショップで作った「野菜アート」で構成した。

高さ2m幅1mの巨大な顔は白菜・大根・カボチャなどで制作。野菜アート作りは小針・小新・坂井輪中学生54名参加、写真を撮り展示。枝豆の殻、紙粘土作りは1ヶ月前から友人・知人に依頼。会員の作品も「野菜」をテーマにしたものなど21点展示。

第2会場は西新潟市民会館周辺の大堀幹線沿いの商店・医院など店頭6か所に中学生、公民館で活動する絵画・写真のグループから募集した作品32点を展示。屋外展示のため、風雨に耐えるよう原画を写真に撮りラミネート加工して展示した。

見学者の感想は「迫力があって面白い」「びっくりしました。メインの作品は度肝を抜かれました」「野菜のみずみずしさが失われて枯れていく様子が面白く、こういうのも造形になるんだと楽しませて頂きました」「子どもさんたちの作品伸び伸びと自由な発想で楽しかった」「これだけユニークな作品が見られる展覧会も珍しいです。作品の大胆さに勇気と元気をもらいました」など。

ポイントは個性的な作品の制作と参加人数を増やすことにあった。西区を代表する「枝豆」から「野菜アート」を協働で作ろうと発想した。結果、アートに関心ない人からも興味をもらい幅広い年齢層の入場者があった。野菜や展示場所の提供など組織・店舗の協力、支援と、中学生をはじめとする沢山の人の参画が成功要因である。1日100人を超す入場者の楽しそうな表情で「目標を達成した」と思う。(文：山本)

- 9月19日(水) シンポジウム「地域社会にアートはどう貢献するか」
代表 藤由暁男 vs 新潟市美術館学芸員 荒井直美 (展示会場内)
- 9月23日(日) アートとポップスの競演 (展示会場内)